新約聖書 ルカによる福音書 10 章 25 節―37 節（新共同訳）

[25]すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。
「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」[26]イエ
スが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言
われると、[27]彼は答えた。「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思い
を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛
しなさい』とあります。」[28]イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行
しなさい。そうすれば命が得られる。」[29]しかし、彼は自分を正当化しようと
して、「では、わたしの隣人とはだれですか」と言った。[30]イエスはお答えに
なった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲わ
れた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去
った。[31]ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向
こう側を通って行った。[32]同じように、レビ人もその場所にやって来たが、そ
の人を見ると、道の向こう側を通って行った。[33]ところが、旅をしていたある
サマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、[34]近寄って傷に油と
ぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱し
た。[35]そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に
渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰り
がけに払います。』[36]さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲わ
れた人の隣人になったと思うか。」[37]律法の専門家は言った。「その人を助け
た人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしな
さい。」

※第 1 朗読と第 2 朗読は末尾に掲載

説教「隣人になる」

本日の福音書は、ある律法の専門家がイエスを試そうとして、こう質問した場面から始まります。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか」（ルカ 10:25）。

その質問にイエスは直接答えずに「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と問い返します（ルカ 10:26）。律法とは、旧約聖書のことを指します。「あなたはそれをどう読んでいるか」とは、「あなたはそれをどのように理解しているか」ということです。

イエスの問いかけに対して彼は、「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい」という旧約聖書の戒め（レビ記 19:18 と申命記 6:5）を引用します。

聖書の内容がきちんと頭の中に入っていて、それをすらすらと暗唱する律法の専門家に、イエスはこう言いました。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる」（ルカ 10:28）。

「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」とは、全身全霊で神を愛することへの招きです。

神を愛することと、隣人を愛することは、別々のものではありません。神を愛するとき、その人は他者への愛に生きています。そして、「隣人を自分のように愛しなさい」とは、それらの愛の中に、自分自身への愛も含まれるということです。

「では、わたしの隣人とはだれですか」とイエスへの挑戦を込めて、さらに質問を続ける彼に、イエスは「善きサマリア人（じん）」のたとえ話を語ります（ルカ 10:29）。追いはぎに襲われて服をはぎ取られ、殴られ、半殺しにされ、道端に捨てられたユダヤ人の同胞を、神に仕える祭司や、神殿で働くレビ人は、見て見ぬふりをして通り過ぎていきました。

しかし、ユダヤ人と敵対関係にあったサマリヤ人だけが、その人を助けたのです。ここには、社会的立場、人種、宗教のへだてを越えた無償の愛がありました。

傷ついたその人を見て憐れに思ったサマリア人は、その人に近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱しました。傷口にぶどう酒を注ぐのは消毒をするため、油は傷を癒すためにでしょう。そして翌日、当時の二日分の労働賃金と言われるデナリオン銀貨二枚を宿屋の主人に渡してその人の介抱を頼み、足りなかったら帰りがけに自分が払うと言いました。自分が帰りがけにまた戻ってくること、お金が足りなければまた払うことを伝えておけば、宿屋の主人は、しっかりとその人を看病してくれるでしょう。

それらの話を語り終えた後、イエスは律法の専門家に「さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか」と尋ねました（ルカ 10:36）。彼は「その人を助けた人です」と答えました。その答えを聞いて、イエスは「行って、あなたも同じようにしなさい」と言ったのです（ルカ 10:37）。

この律法の専門家が、イエスに「わたしの隣人とは誰ですか」と尋ねたがゆえに、イエスはこの「善いサマリア人」のたとえ話をしました（ルカ 10:29）。

この律法の専門家は、「隣人」という言葉を使うとき、無意識のうちに「私の隣人とはこの人たちであり、それ以外の人たちは私の隣人ではない」というイメージを持っています。だからこそイエスに対し、「私は、どういった人たちを隣人として愛すべきですか」という意味の質問をします。ところがそれに対して、イエスが善きサマリア人の話で示した隣人のイメージは異なるのです。

「隣人の範囲」は初めから決まっているものではありません。助けを求めている人や、苦しんでいる人を見て憐れみ、自ら近づいていくことによって、その人の隣人になっていくのです。

律法の専門家は最初、何をすれば永遠の命を受け継ぐことができるかとイエスに尋ねました（ルカ 10:25）。イエスは、追いはぎに襲われた人を死から救ったサマリア人のたとえを語り聞かせることによって、この問いに答えたのです。

永遠の命は、困窮した人、苦しんでいる人のために、見返りを求めずに、憐れみを示す行為によって受け継ぐことができると、イエスは示唆します。

このサマリア人は、永遠の命を得るために、追いはぎに襲われた人を助けたわけではないでしょう。理屈ではなく、敵味方関係なく、目の前で苦しんでいた人をどうしても助けずにはいられない衝動によって、それを行ったのだと思います。

この話からは、その人を懸命に助けている時の、サマリア人の大きな喜びが伝わってきます。そこにあったのは、大きな喜びだったのだと感じます。

実際の話で、戦争中、死んだ敵兵を憐れに思い弔った尊い話があります。それは、弔った側の、喜びというより、悲しみの心を感じさせられるものです。

ですが、このサマリア人からは、まだ生きている人の命を助けることのできた、その大きな喜びが伝わってくる気がします。

聖書に記されている、イエスが語るたとえ話も、それを読む人によって、またその時の読み手の心の状態によって、様々な捉え方や感じ方になると思います。

突如、追いはぎに襲われ、服を剥ぎ取られ、殴られ、残虐な行為の犠牲となり、屈辱と絶望のうちに道端で倒れていたその人に自分自身を重ね合わせる人もいるでしょう。また、その人を助けたサマリア人に自分の姿を投影させる人もいるでしょう。

現代の日本において、半殺しにされて道端で倒れている人を見ることはそうそうありません。

しかし、肉眼でハッキリとそれを見ることはなくとも、そのような心の状態にいる人々は、沢山いるのだと思います。

そして、「人の命を助ける」とは、必ずしも肉体的な命を助けることだけではありません。人の心を助けたり、人の心を救うことも、「人の命を助ける」ことに含まれるのです。

いつでも無償の愛をもって、多くの人を助けねばならないということではありません。

生涯のうちで、たった一度でも、このサマリヤ人のように神の愛によって人の心を救い、人の命を助けることができたならば、それは神を喜ばせる尊いことであり、永遠の命に通じることなのではないでしょうか。

本日の福音書は、イエスのこのような言葉で締めくくられます。「行って、あなたも同じようにしなさい」（ルカ 10:37）。

私たちは、この地上で与えられた限りある日々の中で、自分自身と隣人を愛し、希望と喜びをもって共に歩んでいきましょう。

お祈りをいたします。
天の父なる神様。私たちは地上の旅の中で、様々な人と出会います。助けられるときも、助けるときも、あなたの愛によって、永遠の命へと至る道を歩ませてください。御子 主イエス・キリストによって祈ります。アーメン

＊＊＊＊＊＊ 説教ここまで ＊＊＊＊＊＊

以下、本日に関連する聖書箇所（第１朗読と第２朗読）です。

旧約聖書 申命記 30 章 9 節―14 節（新共同訳）

[9]あなたの神、主は、あなたの手の業すべてに豊かな恵みを与え、あなたの
身から生まれる子、家畜の産むもの、土地の実りを増し加えてくださる。主は
あなたの先祖たちの繁栄を喜びとされたように、再びあなたの繁栄を喜びとさ
れる。[10]あなたが、あなたの神、主の御声に従って、この律法の書に記されて
いる戒めと掟を守り、心を尽くし、魂を尽くして、あなたの神、主に立ち帰る
からである。
[11]わたしが今日あなたに命じるこの戒めは難しすぎるものでもなく、遠く及
ばぬものでもない。[12]それは天にあるものではないから、「だれかが天に昇り、
わたしたちのためにそれを取って来て聞かせてくれれば、それを行うことがで
きるのだが」と言うには及ばない。[13]海のかなたにあるものでもないから、「だ
れかが海のかなたに渡り、わたしたちのためにそれを取って来て聞かせてくれ
れば、それを行うことができるのだが」と言うには及ばない。[14]御言葉はあな
たのごく近くにあり、あなたの口と心にあるのだから、それを行うことができ
る。

新約聖書 コロサイの信徒への手紙 1 章 1 節―14 節（新共同訳）

[1]神の御心によってキリスト・イエスの使徒とされたパウロと兄弟テモテから、
[2]コロサイにいる聖なる者たち、キリストに結ばれている忠実な兄弟たちへ。わ
たしたちの父である神からの恵みと平和が、あなたがたにあるように。
[3]わたしたちは、いつもあなたがたのために祈り、わたしたちの主イエス・キ
リストの父である神に感謝しています。[4]あなたがたがキリスト・イエスにおい
て持っている信仰と、すべての聖なる者たちに対して抱いている愛について、
聞いたからです。[5]それは、あなたがたのために天に蓄えられている希望に基づ
くものであり、あなたがたは既にこの希望を、福音という真理の言葉を通して
聞きました。[6]あなたがたにまで伝えられたこの福音は、世界中至るところでそ
うであるように、あなたがたのところでも、神の恵みを聞いて真に悟った日か
ら、実を結んで成長しています。[7]あなたがたは、この福音を、わたしたちと共
に仕えている仲間、愛するエパフラスから学びました。彼は、あなたがたのた
めにキリストに忠実に仕える者であり、[8]また、“霊”に基づくあなたがたの愛を
知らせてくれた人です。
[9]こういうわけで、そのことを聞いたときから、わたしたちは、絶えずあなた
がたのために祈り、願っています。どうか、“霊”によるあらゆる知恵と理解によ
って、神の御心を十分悟り、[10]すべての点で主に喜ばれるように主に従って歩み、
あらゆる善い業を行って実を結び、神をますます深く知るように。[11]そして、神
の栄光の力に従い、あらゆる力によって強められ、どんなことも根気強く耐え
忍ぶように。喜びをもって、[12]光の中にある聖なる者たちの相続分に、あなたが
たがあずかれるようにしてくださった御父に感謝するように。[13]御父は、わたし
たちを闇の力から救い出して、その愛する御子の支配下に移してくださいまし
た。[14]わたしたちは、この御子によって、贖い、すなわち罪の赦しを得ているの
です。

教会讃美歌　181 番「ここにいます」、239 番「ひととなりたる」、337 番
「やすかれ」。